ビヨンドトゥモロー
東北未来リーダーズサミット報告書

2011年10月28日～10月30日

開催場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター
主催:一般財団法人　教育支援グローバル基金
後援:内閣府・文部科学省

被災地の高校生による東北の未来への提言

「ビヨンドトゥモロー／BEYOND Tomorrow」は、東日本大震災により被災した若者のリーダーシップ教育支援事業です

東北未来リーダーズサミット概要

主催
一般財団法人教育支援グローバル基金

後援
内閣府、文部科学省

日時
2011年10月28日（金）～30日（日）

参加者
東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島のいずれかの県に居住しており、震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生70名(書類選考によって選出）

趣旨
本サミットは、東日本大震災により被災し、困難な状況を経験しながらも、グローバルな視野を持ち国内外で活躍する志をもつ若者を対象として実施されました。様々な領域で活躍するリーダーたちによるアドバイスの下、東北の復興のあり方についてグループ毎に提言をまとめ、その提言は政治・行政・ビジネス・メディア・NGOなど各方面のリーダーたちの前で参加高校生自らによって発表されました。また、宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、スポーツや音楽、文芸など幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会も提供致しました。震災・津波という困難を経験したからこそ、他者への共感をもって広い社会のために行動を起こすことができる人材が出てくるという信念のもとに、このサミットを通して、参加学生が、逆境を乗り越えて果たすべき社会的な役割について考え、アクションに移すきっかけを提供致しました。

アドバイザーメッセージ

竹中　平蔵

慶應義塾大学
グローバルセキュリティ研究所　所長
総合政策学部　教授

“ビヨンドトゥモローのプログラムに参加した東北地方の若い方々が、東北、日本、そして世界の未来を牽引する力となることを期待します”

東日本大震災という困難を乗り越え、広い世界で活躍することを目指すリーダー候補を被災地から輩出することを目的とするビヨンドトゥモローは、まさに今の社会が必要としている取り組みであると考えます。

私は、ビヨンドトゥモローのプログラムを通して、被災地の学生と対話する機会に恵まれました。震災によってもたらされた彼らの悲しみと衝撃は、想像を上回るもので、そのような困難に直面しても、夢と希望を失うことなく前に進もうとする姿に心を打たれると共に、若い世代が自らの声で生の体験を発信していくことの重要性を痛感しました。

東日本大震災がもたらした悲劇が繰り返されることのないよう、彼らはビヨンドトゥモローのプログラムにおいて提言と発信を行っています。これはまさに社会が求める実践的なリーダーシップの形であると考えます。

政治・経済・法律など多領域にまたがって複雑に絡み合った世界の諸問題を解決するには、強靭なリーダーシップが必要であることは言うまでもありません。想像を絶する困難を体験した被災地の若い世代が、逆境を乗り越えて広い舞台での活躍を目指すことは、そのような強い意志のあるリーダーシップを生むと信じます。

そのようなリーダー育成を目指すビヨンドトゥモローのプログラムに参加した東北地方の若い方々が、東北、日本、そして世界の未来を牽引する力となることを期待します。

代表理事メッセージ

「3.11に起こったことがまだ信じられない」「頭も気持ちもまだぐちゃぐちゃ」「震災体験を家族以外で話すは初めて」「自分より大変な人がいるので申し訳ない」。70名の高校生から異口同音に聞こえてきた。

半年経った「今」、まだ大きな悲しみ、苦しみ、葛藤を抱えた君たちの真実と心の叫びを知った。しかし、それでも自分と向かい合い、強くなろう、自立して復興支援をしようと必死に前を向く君たちの姿。私自身が学び、勇気を貰った。

君たちは既に周囲を支えて行く真のリーダーだ。今回のサミットでかけがえのない仲間、応援する大人の存在を知り、復興提言とアクションプランを考えたことで「自分たちでも何か出来る」という感覚と自信を得たら嬉しい。3日間に心から感謝。

船橋　力
株式会社ウィル・シード
代表取締役社長

参加者の高校生の皆さんと実際にお話をして、全員、「誰かのために」という気持ちを強く持っていると感じました。この皆さんの気持ちや願いを、具体化すべく、ビヨンドトゥモローはできる限りのことをしたいと思っています。

サミットを通じて得た、提言アドバイザーの方々からの刺激、何かを短期間で形にする経験、70名の大切な仲間、そして何よりも世の中のために動く志を、いつまでも大切にしてください。

最後になりましたが、このサミットは多くの方々のご理解、ご支援、ご協力がなければ、実現できないものでした。ここに厚く御礼申し上げます。

近藤　正晃ジェームス
Twitter日本代表、一橋大学客員教授

「私たちはどんな情報だって受け入れます。本当のことを知りたいんです」福島県の高校生の言葉にハッとした。サミットに参加した高校生たちは、誰もが、自分たちの住む町と住む人々の未来をしっかりと見据え、自らの責任を心に把持していることを痛感した。

「若者が未来を作ると大人たちは言うけれど、大人は何をしているんですか」。最終プレゼンでの高校生からの問いに、どれだけの大人が明確に答えられるだろうか。

当サミットが多くの大人の方々のご協力によって実現したように、未来を担う若者と、それを支える大人、その両者がいなければ、日本の未来は遠のく。当サミットは、大人と若者が共に未来に責任をもつ、未来の始まりだった。

藤沢　久美
シンクタンク・ソフィアバンク副代表
社会起業家フォーラム副代表

予想していたよりも、とってもレベルの高いディスカッションや発表が行われていて、びっくりし感心しました。

2泊3日のとても濃密な時間を過ごし、ちょっと憔悴した大人を尻目にまだまだ元気いっぱいの彼ら彼女らの閉会式での笑顔は素晴らしかったです。

今回の東北未来リーダーズサミットを通し、参加した学生の皆さんが自分たちの可能性に気づく機会になれば、とても嬉しく思います。

東北と、そして日本の未来は明るいな、と感じさせてもらいました。ありがとう。

高島　宏平
オイシックス株式会社
代表取締役社長

主催者挨拶

一般財団法人
教育支援グローバル基金
理事・事務局長

坪内 南

“確固として見ることが出来たのは、70名が一様にして持つ、「共感力」と「使命感」”

「ビヨンドトゥモロー」は、東日本大震災により被災した若者たちが、逆境の中でも希望を失うことなく、大きな夢を抱いて社会に貢献する人材に育つことを目的とするリーダーシップ教育支援事業です。本事業の一環として、2011年10月28日～30日に、「ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミット」を開催いたしました。

「被災地の高校生による、東北の未来の姿を提言する」というテーマのもとに、3倍以上の倍率の選考をくぐりぬけた70名の高校生が、岩手県、宮城県、福島県の3県から東京に集い、2泊3日を共にしました。各チーム7名ずつ、出身県も学校も性別もバラバラの高校生が振り分けられ、各界で活躍する提言アドバイザーと、大学生チームリーダーの助言を得ながら、自らの被災体験を共有することに始まり、議論を経て、最終的には自分たちで実現可能な復興プロジェクトの提案をまとめるというプロセスを経験しました。

涙も笑いも交じる、それは濃密な時間でした。しかしその中に確固として見ることが出来たのは、70名が一様にして持つ、「共感力」と「使命感」。家族を失い、家を流され、放射能の恐怖に怯え、それぞれが困難な生活を強いられている中で、誰もが「東北のために自分に何ができるか」という意識を失わず、人のため、社会のためになる人間になりたいと、自分の進路を真剣に考える姿勢を忘れていませんでした。

優れたリーダーシップとは、組織の長になるということではありません。自分や自分の周囲にいる人のことだけでなく、広い社会に属する人々の状況に想いを馳せ、その人たちのために行動していく力こそが、時代を切り開く上で求められるリーダーシップの形なのではないでしょうか。ビヨンドトゥモロー東北未来リーダーズサミットに集まった70名は、そのようなリーダーシップが東北の若者の多くに存在することを証明してくれたのです。

ビヨンドトゥモローは、このように逆境にあっても夢を持ち、困難を乗り越えて未来に羽ばたこうとする今回の70名のような若者が未来を牽引する役割を担うべく、支援をしていきたいと考えます。そして被災した若者が本事業を通して、自らのビジョンを描き、自分の夢を実現する道をみつけ、地域社会、日本、世界のために行動を起こせるリーダーになる一助になればこんなに嬉しいことはありません。

本サミットの開催にあたっては、多くの方々にご協力をいただきました。被災地からリーダー候補となる人材を輩出するという趣旨に賛同し、ご支援くださった皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

そして70名の高校生の皆さん。大変な状況の中、東京まで来て、勇気をもって発信してくれて、本当に、ありがとう。

目次

1. アドバイザーメッセージ 03
2. 代表理事メッセージ 04
3. 主催者挨拶 05
4. プログラム概要 07
   I. 参加学生紹介 09
   II. スケジュール 11
5. 体験の共有 13
6. 東北の未来への提言 19
   I. 東北復興の専門家へのインタビューセッション 20
   II. リーダーとの対話 24
   III. 最終提言発表 25
7. 参加いただいた方々 29
8. メディア掲載 35
9. 協力団体 36
10. BEYOND Tomorrowとは 37

プログラム概要

ビヨンドトゥモロー 東北未来リーダーズサミットは、以下の三点を目的として実施されました。

1. **国家戦略担当大臣に「東北の未来についての提言」を届ける**

2. **様々な領域で活躍するリーダーとの対話を通し、自らの将来のビジョンを具体的に描く**

3. **震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち、国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生70人の高校生が繋がり、絆を持ち、コミュニティを築く**

コメント抜粋 (1/2)

BEYOND Tomorrowのプログラムは、今回をきっかけとして今後更に発展して行くとの事。今回出会った多くの人々と、遠くない将来、形はどうであれ必ず再会出来ると信じています。

共通項（どんな事でも良い）を持った若い世代が集い、社会に問いかけをする場を持つ意義は大きい。そこに、絆が生まれます。一人一人の力を一同に会し、グループの力として一つの大きなビジョンを描き、アクションを起こす。

実は今回、提言をつくるにあたり「7人で1年間継続して取り組み、実現可能なもの」という条件が課せられていました。即ち、今回の提言は「自分たちの力で実現可能なもの」ということです。ここから我々が実際にアクションを起こすに至れれば、それ以上に素晴らしい事はないでしょう。

佐藤滉
岩手県立盛岡第一高等学校

同じ世代の学生と、ある成果に向かって議論する東北未来リーダーズサミットは、今まで経験したことのない世界でした。様々な領域のリーダーとの対話の中で、海外に飛び出すという新たな目標が生まれました。

元川裕太
いわき秀英高等学校

昨日までの3日間を思い返してみる。本当に凄かったの一言。もう一回やりたい。想像以上で一生モノになった。素晴らしい高校生があんなにいるんだからこれからの東北は安泰だ。そんな中に私もちゃっかり混ざりたいと思った。

阿部菜穂
宮城県気仙沼高等学校

今、この3日間とても濃密な時間を過ごせたという気持ちでいっぱいです。他県と関わる機会があまり無かっただけにこのようなサミットに参加出来たこと、意義ある時間が過ごせたこと、良かったと思っています。このサミットに参加したことでちょっとだけ変われた気がします。これからは自分から何かアクションを起こしていけるよう頑張ります！

坂本佑季
福島県立湯本高等学校

プログラム概要

コメント抜粋 (2/2)

BEYOND Tomorrowの東北未来リーダーズサミット。かなり疲れたけどそれ以上の収穫がありました。ツイッター日本代表の方や日本の各業界の第一人者の方とお話しを出来て本当に良かった。凄く勉強になりました。貴重な体験をありがとうございましたプロジェクト案を実行し、夢を叶え、東北の復興の力になれるように頑張りたいと思います。

西城国琳
宮城県気仙沼高等学校

サミットに参加するまでは、自分は被災者なんだ、という意識が強くありました。こんなに辛い経験をした、こんな被害も受けた、こんなに大変なんだ。そういうことばかり考えて、チームの議論でもそういった発言を繰り返していました。

でも、サミットで「じゃあどんなアクションを取るべきなんだ。どうすれば状況は良くなるのか」という問いに出会って、今までそういった視点をまったく持っていなかったことに気付かされました。

増子光希
福島県立郡山高等学校

昨日までのサミットを経て、自分の周りで起こってることがとても小さく感じる。昨日までのみんなとの話がとても大きな影響を与えている。

菊池翔太
岩手県立大船渡高等学校

めったに体験出来ないすごく貴重な経験が出来て、皆さんにインスパイアされて、やる気に満ち溢れています!!今回この企画に関わってくださった皆さんに本当に心から感謝しています。私もいつか皆さんのようになりたい!

佐々木瞳
宮城県気仙沼高等学校

リーダーズサミット、楽しかった。大変忙しかったけど、すごい充実していた。学校が億劫になるほど、昨日までいた場所がすごく恋しい。レベル高い会話や 空間だったけど、復興支援や街づくりを 改めて考え直す時間だった。

藤田真平
神奈川県立岸根高等学校

今回は本当にいい経験をさせていただきありがとうございました。様々な分野で活躍されている方々との対話は本当に貴重だったと思います!それにたくさんの仲間が出来てよかったです。自分達の手で東北を絶対に復興させたいです!

千田綾太
専修大学北上高等学校

プログラム概要

参加学生紹介

東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島のいずれかの県に居住しており、震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生70名が選出されました。

参加者一覧(1/2)

氏名	学校	学年	氏名	学校	学年
			岩手		
伊藤大二朗	岩手県立大船渡東高等学校	3	佐々木優介	花巻学院花巻東高等学校	3
伊藤裕太	岩手県立宮古商業高等学校	3	佐藤可奈子	岩手県立高田高等学校	3
今井友理恵	岩手県立盛岡第一高等学校	3	佐藤滉	岩手県立盛岡第一高等学校	3
岩崎開	岩手県立大船渡高等学校	3	千田綾太	専修大学北上高等学校	3
上澤知洋	岩手県立盛岡第一高等学校	3	千葉真英	岩手県立大船渡高等学校	3
菊池翔太	岩手県立大船渡高等学校	3	長岡輝	花巻学院花巻東高等学校	3
菊池春花	岩手県立花北青雲高等学校	3	中野春佳	岩手県立宮古商業高等学校	3
菊地将大	岩手県立高田高等学校	3	長谷川健太	岩手県立宮古高等学校	3
倉本知邑	岩手県立盛岡第一高等学校	3	福田順美	岩手県立高田高等学校	3
佐々木奈菜	岩手県立大船渡高等学校	3	船越絵稚	岩手県立宮古高等学校	3
佐々木ひとみ	岩手県立盛岡第一高等学校	3	梁田麻佳	岩手県立盛岡第一高等学校	1

プログラム概要

参加学生紹介

東日本大震災の際に、岩手・宮城・福島のいずれかの県に居住しており、震災を乗り越えてグローバルな視野を持ち国内外で活躍するリーダーになることを志す高校生70名が選出されました。

参加者一覧(2/2)

氏名	学校	学年	氏名	学校	学年
		宮城			
阿部菜穂	宮城県気仙沼高等学校	3	佐藤楓	宮城県仙台三桜高等学校	3
阿部里紗	宮城県石巻西高等学校	3	佐藤慶治	宮城県志津川高等学校	3
石川ひとみ	常盤木学園高等学校	3	佐藤拓磨	東北高等学校	3
伊藤美晴	宮城県気仙沼高等学校	3	菅原彩加	仙台育英学園高等学校	1
遠藤有紗	宮城県東松島高等学校	3	杉山隼人	宮城県利府高等学校	3
遠藤見倫	宮城県立石巻北高等学校	3	鈴木聡	仙台育英学園高等学校	3
遠藤亮子	東陵高等学校	2	関本将乃	仙台育英学園高等学校	3
尾形沙樹	宮城県気仙沼高等学校	3	高橋聡	仙台育英学園高等学校	3
小澤由佳	聖ウルスラ学院英智高等学校	1	高橋奈々美	宮城県宮城第一高等学校	1
小野寺栄	仙台育英学園高等学校	3	高橋真彩	仙台白百合学園高等学校	3
小野寺結衣	常盤木学園高等学校	3	竹山まい	宮城県石巻市立女子高等学校	3
小山恭文	宮城県気仙沼向洋高等学校	3	中谷匡美	宮城県石巻市立女子高等学校	3
加藤英介	東陵高等学校	3	日高慎	聖和学園高等学校	3
菊地真未	宮城県石巻市立女子商業高等学校	3	布田ちはる	常盤木学園高等学校	3
日下マリア	仙台育英学園高等学校	1	松田孝晴	宮城県利府高等学校	3
穀田龍二	宮城県気仙沼高等学校	3	三浦悠	宮城県気仙沼高等学校	3
西城国琳	宮城県気仙沼高等学校	3	森竜二	宮城県気仙沼向洋高等学校	3
佐々木瞳	宮城県気仙沼高等学校	3	山内留衣	仙台白百合学園高等学校	3
		福島			
今井千寿瑠	いわき秀英高等学校	3	増子光希	福島県立郡山高等学校	1
遠藤崇行	郡山商業高等学校	3	松本薫	いわき秀英高等学校	3
大橋一揮	福島県立安積高等学校	3	目黒妃呂美	福島県立相馬東高等学校	3
坂本佑季	福島県立湯本高等学校	3	元川佑太	いわき秀英高等学校	3
菅野翼	福島県立工業高等学校	3	柳澤一紀	福島県立あさか開成高等学校	2
新妻聖	いわき秀英高等学校	3			
		神奈川			
藤田真平	神奈川県立岸根高等学校	3			

プログラム概要

スケジュール

10月28日（金）

20:30	オリンピックセンター到着
20:45～21:55	オリエンテーション

10月29日（土）

8:00～ 9:00	朝食会 – ゲスト: 高成田 享　特定非営利活動法人　東日本大震災こども未来基金 理事長 松田　公太　　参議院議員、タリーズコーヒージャパン創業者
9:30～ 10:00	合唱練習
10:00～10:30	課題発表
10:30～12:00	体験共有 – ゲスト: 佐藤　輝英 株式会社ネットプライスドットコム 代表取締役社長　兼　グループCEO 為末大　ハードル選手
12:00～13:00	昼食会 – ゲスト:　松崎　みさ　株式会社アシモード　代表取締役
13:00～13:30	インタビュー準備
13:30～14:45	インタビューセッション – 講師: 藤沢　烈　　一般社団法人RCF復興支援チーム　代表理事 東日本大震災復興対策本部の非常勤スタッフ 西川　智　　国土交通省土地市場課長 濱坂　都　　特定非営利活動法人ジェン（JEN） 国内事業部広報担当マネジャー
14:45～15:30	プレゼンテーション準備
16:00～16:30	中間発表会 – ゲスト: 近藤　正晃ジェームス　　Twitter日本代表、一橋大学客員教授 高島　宏平　　オイシックス株式会社 代表取締役社長 牧原　秀樹　　前衆議院議員　弁護士・ニューヨーク州弁護士 政策研究大学院大学客員研究員
16:30～18:00	プレゼンテーションのブラッシュアップ
18:00～19:00	BTスカラーシッププログラム説明会
19:30～21:30	夕食会 – ゲスト: 浅尾　慶一郎　　衆議院議員

10月30日（日）

8:00～ 8:30	合唱練習
8:30～ 9:30	発表練習
10:30～ 13:00	閉会式
13:00～ 13:30	記者説明会

BEYOND
Tomorrow

体験の共有

2011年3月11日にいったい何が起こったのか。体験共有の時間が始まり、参加学生がそれぞれのストーリーに耳を傾ける中で、会場の空気が劇的に変わっていきました。皆が真摯に言葉を搾り出し、それを真剣に受け止める。今まで考えても見なかった視点に気づき、同世代の経験に涙を流す。

全員のスイッチが入った音が聞こえたようでした。1日目には想像も出来なかった表情が、仕草が、姿勢が、自然と生まれました。一人ひとりのストーリーが、そしてこの時間を共に過ごし生まれた絆が、3日間のプログラムの始まりとなり、土台となりました。

以下、彼らを代表して閉会式でスピーチをしてくれた参加学生の体験をご紹介いたします。

菊地将大　岩手県立高田高等学校

私は３月１１日に災害の恐ろしさを痛切に感じました。その日、眼前に広がる馴れ親しんだ街は、巨大な津波によって瞬く間に壊滅していきました。波は大量の砂と共に町の中心へと進み、 間もなく砂が煙と共に町を覆いました。周りには、泣きながら避難する小学生や立ち尽くす大人たちの姿がありました。悪夢のような光景でした。

私の住む陸前高田市は、その犠牲者が約1800人にも及びました。私の両親も例外ではありません。私は何箇所もの遺体安置所を訪れました。遺体はどれもあざで赤黒く、海水を吸って膨れていました。中には体の一部を失くしてしまった人もいました。私の父と母も、傷だらけで元の姿と違っていたので、簡単に見つけることはできませんでした。両親の姿を見た時、深い悲しみに襲われましたが、その気持ちはすぐに消え去りました。毎日の生活が大変で、いつまでも悲しんでいる余裕などなかったのです。

しかしそんな状況の中、日本だけでなく世界各国からの支援がありました。その支援のおかげで私たちは今日を生きることができています。

８月には、その感謝の意を述べる機会がありました。私は被災者代表として高校生平和大使に選ばれ、国連欧州本部を訪れました。そこでは支援への感謝や復興への決意を述べました。さらに震災によって感じた、防災の必要性や、国際連帯の重要性を訴えました。この活動が、被災地に勇気を与えられたのではないかと思います。今後も被災者の一人として、世界中に発信して行きたいと思っています。

現在、街は復旧を終え、復興へと向かっています。しかしながら、未だたくさんの課題が残っているのも事実です。例えば、雇用の問題。多くの人が職場を失い、経済的困難に陥っています。友人の母はそれが原因で自ら命を断ちました。こんな状況を打開しなくては、被災地の将来は暗いままです。

私の目標は被災地の復興を先導する立場となることです。以前のような活気ある街へとこの手で導きたいのです。そのために私たち若者が立ち上がり、被災地の将来を担っていかなければなりません。一日でも早く復興へと向かえるよう、精一杯頑張りたいと思います。

この度の東北未来リーダーズサミットでは、高校生同士で一つの提言を作り上げる機会がありました。各方面で活躍する提言アドバイザーと共に議論を重ねることで考えの幅が広がり、自分たちに出来ることが明確になりました。今回得た成果を糧に、今後それぞれの地域や立場でリーダーシップを発揮してきたいと思います。

阿部菜穂　宮城県気仙沼高等学校

3月11日。その日は午前授業だったため、地震が起きた時刻には既に、私は母と南三陸町にいました。未だかつて経験したことのない地面が割れる程の大きな地震に、津波が来るだろうことは安易に予想できました。そこで私は母と、高台にある避難場所の中学校に避難しました。自宅や住んでいる地域一帯がまるごと海のように変わり果てるのには、そう時間はかかりませんでした。驚きと無力さを感じる間もなく、数秒たらずで波はもりあがり、電柱や車と共に私たちのいる高台にまで押し寄せてきました。必死の思いで走り、土の斜面を登ろうとしましたがうまく登れず、私と母は一瞬で波にのまれてしまいました。

濁流の中は真っ黒く視界がない状態で、手足が動かせないほどの水圧でした。なんとか息を止め堪えようと試みましたが、すぐに息は出来なくなり大量に水を飲みながら私は死を覚悟しました。その後、屋根と車に体が挟まれ、水面に上がれたことはほんとうに奇跡的なことでした。しかし、母は未だに見つからないままで、私だけが助かってしまったという事実に、私は少しも喜びを感じることは出来ません。

あの日、ショッピングセンターに行こうという母の誘いにのっていたら、助かっていたかもしれない。あの時、違う方向に逃げていたならば。あの時、たった1メートル離れたところで同じように流された母の服をつかむことができていたならば。いつも、あの日、あの時のことが鮮明に思い出され、こうしていたら、ああしていたらと後悔ばかりがつのります。私にとって最大の理解者であり共感者であり、いままでもこれからも憧れである最愛の母はもうおらず、夢だった親孝行はもうできないのです。

今までは、高校生たちが震災のことを真剣に捉え、受け止め、考え、共に議論し合える場はなかったため、今回は私と同じような、もしくは更に辛い経験をした人たちに出会い、少しでも思いが共有できたらと思って参加させて頂きました。

ディスカッションやプレゼンテーション等、この三日間は私が今まさに求めていたものに限りなく近く、期待を上回る楽しさでした。また、何かをしたいという意志を持って集まった人たちばかりで、大きな刺激を受けました。

私は、親を亡くした私のような若者が集える場を作りたいと考えます。この気持ちをともに分かち合い、前に進むための力を享受し合えるような場を作っていきたいと思うのです。ビヨンドトゥモローに参加し、強く希望を持ち、微力ながら少しでも何らかの形で復興に携わって行きたいと改めて思いました。

父が救命士ということもあり、私は小さい頃から医療に興味がありました。また、今回の震災を経験し、私も医療職に就きたいと強く思うようになりました。将来は、臨床工学士の国家資格を取得して宮城の病院で働き、人の役にたち自分の存在意義を確立していきたいと思います。

菅原彩加　仙台育英学園高等学校

3月11日は、中学校の卒業式でした。10年間共に過ごした仲間とのすばらしい旅立ちの日、一生の思い出に残る良い日になるとばかり思っていました。

家に帰るとすぐに地震が起きました。今までに感じたことのないほど大きな揺れでした。地震が発生して、停電になってしまったため、テレビから情報を得ることが出来ず、携帯で津波がくるという情報を得て、逃げようとした時にはすでに遅く、地鳴りのような音と共に一瞬にして津波は家と私の家族を飲みこみました。がれきと黒い水に流され、「もう死ぬんだ」「高校の制服を着たかったな」と、たくさんのことが頭の中を駆け巡りました。

しばらく流されてがれきをかきわけて出ていくと、がれきの下から母が私の名前を呼ぶ声が聞こえました。がれきをよけると、くぎと木がささり、足は折れ、変わり果てた母の姿がありました。右足がはさまって抜けず、一生懸命がれきをよけようと頑張りましたが、私一人ではどうにもならないほどの重さ、大きさでした。母のことを助けたいけれど、このままここにいたらまた流されて死んでしまう。

助けるか、逃げるか – 私は自分の命を選びました。

今思い出しても涙の止まらない選択です。最後その場を離れる時、母に何度も「ありがとう」「大好きだよ」と伝えました。「行かないで」という母を置いてきたことは本当につらかったし、もっともっと伝えたいこともたくさんあったし、これ以上つらいことはもう一生ないのではないかなと思います。その後私は泳いで小学校へと渡り一夜を明かしました。

この後も私が体験したことはもっともっとたくさんあります。辛くて死のうかと思った日もありました。なんでこんなに辛いんだろうと思った日もあるし、家族を思って泣いた日も数え切れないほどありました。今回の震災で私ははかりしれないほど多くを失いました。

しかし、この震災によって得られたものもたくさんあります。そしてそれはこれから、自分の気持ちや行動次第でいくらでも増やしていけると私は思います。他の人からみれば私はかわいそうな高校生かもしれませんが、私はそうは思いません。私には支えてくれるおじいさんやおばさんがいます。辛い時に助けてくれる友達がいます。このような経験をしたから得られたチャンスがあります。そして、どんなことも頑張れる自信もあります。また、辛い人の気持ちを分かってあげることもできます。

だから私は将来、私と同じつらい思いをしている子どもたちを助けられる仕事をしたいと思っています。また日本に支援をしてくれた国への恩返しとして、国際ボランティアにも取り組んでみたいです。

この先、辛いこともたくさんあると思いますが、私にしかできないこと、私だからできることをたくさんみつけて誰かの役にたち、失ったものと同じくらいのものを、人生を通して得ていきたいと思います。

今回の東北未来リーダーズサミットは三日間という短い間でしたが、今までにないほどたくさんの学生と触れ合うことが出来ました。また、私が住む宮城県のことだけでなく、福島や岩手などに住む学生と交流することで、今の状況や気持ちを共有することが出来ました。

増子光希　福島県立郡山高等学校

私達福島県民は今、試練の中にいます。東日本大震災は東北に甚大な被害をもたらしましたが、福島県民にとって、この震災に加え、東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染問題も大きな問題です。

特に、福島に対する心ない風評には、私自身、大きく心を痛めています。例えば、福島で生産された贈答用の桃が、放射能測定も行い安全確認し発送されたにもかかわらず、そのまま送り返されてくるという話がありました。私は、自分たち自身が放射能の脅威に怯えながら暮らさなければならないだけでなく、福島県民が放射能を他県に撒き散らす加害者のようにいう日本人がいることにとても悲しい気持ちになっています。

私達は福島で懸命に生きています。“うつくしまふくしま”の再生と福島県の復興をかけて一致団結して取り組んでいます。そんな福島を多くの世界の人々、日本の皆さんに理解して欲しいと思います。多くの人に、福島の味方になって、絆を持って私達を温かく見守ってほしい。その姿を怖がらず見に来て欲しい。福島の現状を知って欲しい。そして、放射能の除染作業に協力して欲しいのです。

私は来年の夏にスイスへ一年間留学します。この留学において、福島の真実、放射能の除染の取り組み、復興にかける真剣な想いや多くの困難を乗り越え懸命に努力する素晴らしい行動力を高校生外交官として熱く伝えたいと思っています。それが、私が今できる福島の復興支援ではないかと考えます。

私達はこの東北で大震災を体験しましたが、不幸だと嘆き悲しんでばかりいられません。たくさんの支援して下さる人々に感謝し、悲しくても前を向いて、つらくても元気を取り戻し、目標を見つけ、希望を持って、夢に向かって進んでいきたいと思います。夢や希望を持って、私達の若い元気な力で新生東北を作っていくことが、私達東北未来リーダーズに課せられた使命であると信じます。

藤田真平　神奈川県立岸根高等学校

震災による被害で、自分の故郷気仙沼市は壊滅的な被害を受けました。その中に、自分が通っていたスイミングクラブも含まれており、自分は泳ぐ場所を失いました。13年間続けていた水泳を奪われ、途方に暮れていた時、インターネットを通じたご縁で神奈川大学の水泳部に声をかけていただき、故郷気仙沼にいる家族と離れ、今、神奈川県で生活しています。

一度はあきらめかけた水泳を続けることができ、震災後6月に開催された神奈川県高校総体競泳大会では7位という成績を収め、関東大会へ出場しました。9月には、山口県で行われた国民体育大会で宮城県代表として自己新記録を更新し、12位という結果を残すことが出来ました。

私の夢は、大学に進学して、日本一の水泳選手になることです。自分が努力を続けて前に進み、結果を出すことが、気仙沼の被災地を元気づけ、自分を育ててくれた方や地域への恩返しになると思い、日々練習に励んでいます。あの震災を乗り越えて、自分に課せられた使命を認識し、東北を活気づけたいのです。

この東北未来リーダーズサミットには、被災三県の高校生が集い、震災にまつわる体験を共有できるよい機会だと思って参加させて頂きました。自分は、被災して以来、数え切れないほどたくさんの人に助けられてここまで来ました。それも全て、父や母や兄弟が大事にしてきた「人と人とのつながり」のおかげだと信じています。このリーダーズサミットの参加者に選ばれ、ここで出会う仲間につながりを持てたことはひとつの奇跡であると思っています。

実際にリーダーズサミットに参加してみて地震や津波だけでなく、原発の被害を受けた人たちとも話し合い、震災復興の意志を高めることが出来ました。また、被災者支援をテーマに、班の仲間と議論をし、具体的なプロジェクト案を作ることが出来、期待していた以上に有意義な時間を過ごすことが出来ました。今後、自分の班で立てた案を実行に移していきたいと思っています。

東北の未来への提言

プログラム2日目の朝、提言の課題が発表されました。

「皆さんは、東北復興チームのメンバーとして、古川国家戦略担当大臣から指名されました。チームのミッションは、東日本大震災を経て、力強い東北を復興させるため、復興に向けた具体的なプロジェクト案を作ることです。東北復興のために、新しいプロジェクトを立ち上げ、今後１年間かけて運営していくことが求められています。」

テーマは以下の3つ。チームごとに課題が課されました。

東北を元気にするビジネスや仕事のあり方
より元気で、より魅力的な東北の復興に向けて、ビジネスや仕事という視点から何が出来るか

安全なまちづくり
地震や津波などの災害に強く、住民が安心して住むことの出来る安全なまちを作るために、何が出来るか

被災者支援
被災者にとって本当に求められている支援とはどういうものか。より良い支援に向けて、何が出来るか

東北の未来への提言

ステップ① 現地の声・ニーズの理解

70人の参加学生は、被災地代表としてサミットに集いました。

現地の課題は何なのか。そして東北の未来と、そこへと向かう復興はどうあるべきなのか。それぞれが、自分の地域で周囲の人びとへのインタビューを実施し、その結果を携えて議論に臨みました。

具体的に現地で何が求められているのか、どんな問題を抱えているのか – 現地代表としての矜持を胸に秘め、地に足の着いた議論が交わされました。

共有された現地の声 (抜粋)

- 親は美容師だが、震災で仕事道具を失ってしまった。そして震災後、ボランティアの人が被災地支援として髪の毛を切ったりしてくれたが、その様子を見て「道具があれば私にも髪を切ることができるのに…」と言っていた。ボランティアの人は善意でしてくれているのだが、結果的に被災地の人達の仕事を奪ってしまっている。ボランティアのあり方、適切な支援物資について考えるべき
- 震災の際には携帯電話が繋がらず全く機能していなかった。災害時には災害掲示板も繋がらないということを聞き、自分自身も災害に備えて家族や友人と安否を確認するための別の手段を備えておく必要があると思った
- 仮設住宅は建設されたが、まだ住環境についての問題は残っている。雇用や食産業の問題も残っている。支援物資の分配にも偏りがある
- 若者がもどってくる環境が必要である。雇用や病院などの整備が今後必要ではないか。また、人との絆を大切にした、コミュニケーションのしっかりした地域社会の形成が大切ではないか
- 原発の風評被害について。贈答用の桃が送り返されてくる例や、福島ナンバーの車が被害を受ける例も。この問題をどうにかしなければいけない
- 決断力・リーダシップが重要。被災度や意見の違いが見られるので、この違いをなくすにはどうすればいいのか？話し合いが大切ではないか？
- 組織的に受動的になってる人が多い。若者離れの問題には、若者が中心になるべきでは。団結して、意見の共有をもっと行うのがよい
- 復興の大きな目標や指針（10年後理想像など）はあるが、短期的な目標（2年後など）がないためにやる気が起きない人が多い
- 身体が不自由な人が安全に暮らせる街が必要。安全でバリアフリーな街づくり。また、津波に対しての意識というものをしっかりと持ち、伝えていく必要がある

東北の未来への提言

ステップ②
東北復興の専門家へのインタビューセッション

自らの実体験と現地の声に基づいて浮かび上がってきた課題と問題意識。その上で迎えた東北の復興において第一線で活躍される専門家との対話の時間は、彼らがより広い視野と貴重なヒントを掴みとるチャンスでした。

それぞれのチームに与えられた課題に沿って選ばれた専門家。誰よりも自分たちが取り組むテーマに詳しい先輩に、短い時間で、何を聞くべきなのか。必要な情報は何か。本当に求められているアクションを、どのように描くのか。事前準備を経てのインタビューは、まさに真剣勝負の舞台となりました。

競うように質問を投げかける参加学生たちの表情には、ひとつでも多くのことを吸収すること、少しでも深く問題の核心に迫ることへの渇望がにじみ出るかのようでした。セッション終了後も講師への質問は続き、熱気が会場を包みました。

テーマA
産業復興 — 東北を元気にするビジネスや仕事のあり方

藤沢　烈　　一般社団法人RCF復興支援チーム　代表理事
東日本大震災復興対策本部の非常勤スタッフ

一橋大学卒業後、飲食店経営～マッキンゼーを経て独立し、ベンチャー企業支援を行う。震災直後より、「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト」で、宮城県におけるほぼ全ての避難所(400箇所)に関するデータを分析し、行政・現地NPO・メディア等に提供。現在は、(社)RCF復興支援チームを立ち上げ、震災関連情報の分析や、被災地における事業創造に取り組んでいる。同時に2011年3月より、政府の非常勤スタッフとして、現地NPOの活動がスムーズに進むための支援を行っている。

プレゼンテーション内容 (参加学生のメモ等より抜粋)

- 仮設住宅以降が始まる5月以降は、地域自治体+地元ネットワーク(まちづくり協議会、復興センターなど)と連携し、被災者の生活再建を促進することが求められる
- 今後は漁船や施設の復旧段階から、水揚げ後の加工・流通産業の支援を通じて、漁業全体の成長を考えていく必要がある
- 観光業の発展のためには、民間が主体となった取り組みが求められる。一つの店舗だけではなく、地域全体を巻き込んだ取り組みが必要。単発的な取り組みだけではなく、効果持続のためには長期的視点に立った取り組みが求められる

質問及び対話内容 (参加学生のメモ等より抜粋)

Q: 風評被害や偏見をどのように克服すべきか
A: 風評被害を克服することを考えるのではなくて、どうしたら日本や各地域がよりよく見られるのかという大きな視野で考えるべき

Q: 復興にはリーダーシップが必要であると考えているが、若者のリーダーシップのあり方についてどう考えるか
A: マネージャーとリーダーの違いについて考えてみることが重要。みんなの方を向いて指示を出すのがマネージャー。みんなに背中を向けて、俺について来いというのがリーダーだと私は考えている

東北の未来への提言

ステップ②
東北復興の専門家へのインタビューセッション

東北の復興において第一線で活躍される専門家をお呼びして、専門家的見地から最新の状況や真の課題について、参加学生自身がインタビューを実施しました。

テーマB
防災計画 — 安全なまちづくり

西川　智　　国土交通省土地市場課長

神奈川県出身、東京大学工学部で都市計画を勉強し、大学院修士課程を修了して国土庁(当時)に入る。国土計画や名古屋大都市圏の計画の仕事をしたあと、アメリカMITの客員研究員。1989年から国土庁防災局で企業防災や国際防災協力の仕事を始める。1992年-95年国連人道問題局災害救済調整部で国際緊急援助を担当。帰国後、東京都に出向して長期計画を担当。霞ヶ関に戻り、水資源計画や中央省庁再編の仕事をした後、アジア防災センター所長、内閣府防災の参事官として2004年10月の新潟県中越地震や2004年12月のインド洋津波に対応、2005年の国連防災世界会議をとりまとめる。工学博士。2009年から世界経済フォーラムの有識者会議に参加。特技は、世界中のどんなお料理もおいしく食べること。

プレゼンテーション内容 (参加学生のメモ等より抜粋)

- 防災とは、自然と人間の接点でできるもの。微弱な社会が異常な自然現象に直撃されると被害が大きい
- 世界の2割の地震が日本で起こっている。戦後、予防のための投資を実施。伊勢湾台風をきっかけに堤防やレーダーを設置。結果、自然災害による死者が減少
- 地図をよく読むことが重要。地名とは、先人が残したその土地の特性を著した言葉。地形の理解にも繋がる

質問及び対話内容 (参加学生のメモ等より抜粋)

Q: 安全、安心とはどういうものだと考えているか
A: 安全を考えるうえで、対象となる人が誰なのかによって答えが異なる。必ず対象が誰なのかを明確にすべき、また、安全を確保するにはお金がかかる方法とお金がかからない方法があることを考慮すべき

Q: 震災直後の民放の報道が多くの批判を浴びているが、商業主義の入った民放の姿勢を変えるにはどうすればいいのか
A: (商業主義という点に関して)その通り。行政の人間が行動すると言論の自由を侵害していると批判されてしまうので、一般のひとがアクションを起こすことが重要ではないか

東北の未来への提言

ステップ②
東北復興の専門家へのインタビューセッション

東北の復興において第一線で活躍される専門家をお呼びして、専門家的見地から最新の状況や真の課題について、参加学生自身がインタビューを実施しました。

テーマC
被災者支援

濱坂　都　　特定非営利活動法人ジェン（JEN）
国内事業部広報担当マネジャー

京都府出身。大学卒業後3年の企業勤務を経てシンガポールに移住。企業勤務を経て、PR会社設立。2006年に日本帰国、広報担当としてJENに参加。2007年、JEN新潟にて始まった中越震災復興支援地域おこし事業「田んぼへ行こう！」で企画および広報を担当。翌年JENパキスタンにて、団体活動ビデオ製作に従事。2009年より現職。東京本部事務局で個人、企業、メディアなど支援者対応を担当。ステークホルダーとの関係を構築するための企画などを行う。東日本大震災後、3月に行った初動調査、緊急物資配布で本部側担当。3月～4月まで事業責任者として石巻にて調整業務、緊急支援物資配布を行った。以後、東京本部にて広報担当に復帰。

質問及び対話内容 (参加学生のメモ等より抜粋)
Q: 被災地間でどのように援助の優先順位を付けているのか

A:
- どう優先順位を付けるかは非常に大切であると同時に非常に難しい問題である。支援の重複は絶対にあってはならず、調整する必要があるのだが、うまくいかないこともある
- 小さな（個人的な）避難所の情報がなかなかあがってこないだけでなく、平等性を重視する観点から指定避難所以外には支援物資を配らない（配れない）
- 被害の規模が大きく、トップダウンのトップそのものが機能不全。NGOとの連携もうまくいかない。 NGOの役割は政府と現地のニーズをつなぐこと

講師コメント (抜粋)

「今回、対象が高校生だということを鑑みて、何枚かスライドを省いてプレゼンテーションを行いました。実際に質疑応答の時間になると、省いた部分を、ほぼ全て、的確に質問されました。これには驚かされました。非常に鋭い視点を皆さんお持ちでした。やはり、実際に震災を経験したということ、そして現地で毎日生き抜いているということは、復興を考える上で非常に大きな力になるんだということを実感しました。彼らの作る提言が、本当に楽しみです」

東北の未来への提言

ステップ③
リーダーとの対話

様々な領域のリーダーをゲストをしてお招きし、メッセージを頂くと共に参加学生との対話の時間を設けました。対話を通し、より広い世界や多様な人生の選択肢の存在、既にリーダーとして活躍されるゲストからのメッセージ等を受け止めることで、70人の参加学生にとっての大きな成長の機会となりました。

“義務や過去よりも、未来や夢を語ることが人を惹きつけ、チームを動かします”

人を動かす選手、人を感動させる選手の持つ資質についてお話させて下さい。

まず、無邪気であること、自分自身の心の中にある思い、今感じていることを大事にすること。
そういう人が、ゲームの流れを変え、チームの空気を変えていきます。
そして、義務や過去よりも、未来や夢を語ることが人を惹きつけ、チームを動かします。

ぜひ皆さんには、無邪気に自分の気持ちを大事にして、未来や夢について語るような人になってもらいたいな、と思います。

僕が好きなスピーチはキング牧師の“I have a dream”です。
実は、このスピーチの中で“We have a dream”と言わずに、”I have a dream”と言ったということが大きいのではないかなと思います。

まず、自分の夢や考えがあって、それが”We have a dream”に変わっていくんだと思います。
ぜひこのサミットで、”We have a dream”に辿りつけるよう、がんばってください。

為末　大
ハードル選手

“自分の経験や体験に基づいて考えるようにして頂きたい”

今、政府の東日本大震災復興構想会議で委員をやっていますが、情報を持っているということがとても重要だと感じています。

皆さんはこれから、東北の未来へ向けて提言を作ります。その際には、必ず自分の経験や体験に基づいて考えるようにして頂きたいと思います。

常に、自分の言葉で語る、そういう習慣を持つことで、相手に対する説得力が増します。また、意見や提言にも深み、強みや厚さが出てくるということだと考えています。

高成田 享
特定非営利活動法人　東日本大震災こども未来基金 理事長

東北の未来への提言

最終提言発表

70人が時にぶつかり合い、時に力を合わせて、全力で走り抜けた3日間。彼ら自身の経験と、現地の声からあぶり出された課題と、専門家の視点も盛り込んだその解決に向けての具体的なプロジェクト案。その成果は、審査員のみならず多くの観衆を驚かせました。

各界でグローバルに活躍する審査員による「プレゼン能力」、「体験との結びつき」、「提言の具体性／現実性」、「提言の斬新さ」等総合的な審査により、最優秀賞1チーム、優秀賞2チームが選ばれました。今回は最優秀賞を受賞したチーム10のプレゼンテーションに用いられたスライドをご紹介いたします。

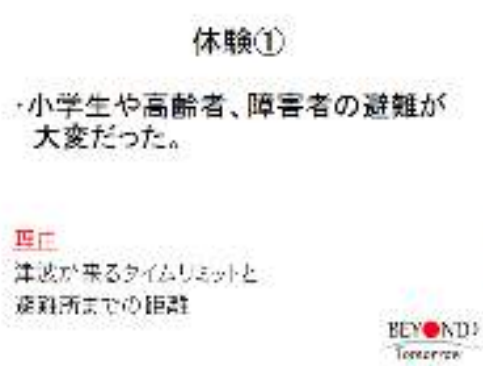
全チームの提言が、古川元久国家戦略担当大臣に届けられます。

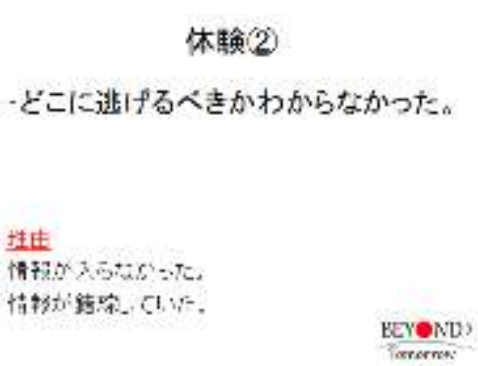
審査基準

プレゼン能力	体験との結びつき	提言の具体性／現実性	提言の斬新さ
4. (3)に加えて、被災地の高校生ならではの強い印象を残すプレゼンである 3. よく練習されている上に、独自の工夫がある 2. よく練習されている 1. 練習が足りていない	4. 自分たちの震災体験ならではの視点が提言に直結している 3. 自分たちの震災体験が具体的にもりこまれている 2. 自分たちの震災体験がもりこまれている 1. 自分たちの震災の体験があまりもりこまれていない	4. 実現のための具体性に富み、ぜひ今後実際に進めるべき提言である 3. 今後の改善をもって実現を検討すべき提言である 2. 具体性が不足し、実現性に乏しい 1. すぐに実現するのは困難	4. 新たな重要な視点が盛り込まれ、東北復興を考える上で新しい視点を与えた 3. 興味深い新たな視点があった 2. これまで気付かない視点があった 1. 一般論にとどまっている

最終提言発表内容 (抜粋 1/2)

何が問題なのか





どのように解決するか

東北の未来への提言

最終提言発表

最終提言発表内容 (抜粋 2/2)

どのように解決するか

解決案①

・避難ルート、避難場所の整備

→案内板(ユニバーサルサイン)の設置

BEYOND Tomorrow

どのように解決するか

解決案②

・防災教育の充実

→地域による防災訓練とコミュニティーション

BEYOND Tomorrow

解決案③

・GPSと緊急地震速報の活用

→緊急地震速報とマップ(現在地と近くの避難所へのルート案内)の連携

BEYOND Tomorrow

具体的なプロジェクト案

解決案の実現に向けて

①案内板を作り、設置する

②学校・企業・地域住民での合同避難訓練の呼びかけ

③GPS(マップ)+緊急地震速報のアプリ開発の提案

BEYOND Tomorrow

具体的なプロジェクト案

解決案の実現に向けて

・人に1匹、第1土曜日ごとの役に参加

→文献地決定(南海・東南海地方)

→(案内板のサンプルと合同防災訓練の企画を持って)全員で地域入り

→自治体・企業等が相談

BEYOND Tomorrow

解決案の実現に向けて

→①と②をその地域で実施(案内板設置まくりと合同防災訓練)

※時間差(まず①をやり、1カ月後に②を)

→結果を見て 6月→文献→8月→東北へ展開

BEYOND Tomorrow

解決案の実現に向けて

・下調べ:避難所を調べる

(渋谷、新宿、横浜)

・製作:案内板の製作(絵・ラミネート)

(八王子、高槻、長谷川)

・まとめ:全体の指揮、自治体や参加者への説明

(宮川)

・案内板の取り付け・設定・防災訓練

(全員)

BEYOND Tomorrow

東北の未来への提言

最終提言発表

審査員による講評(1/2)

岡島　悦子　株式会社プロノバ　代表取締役CEO

商社、外資系経営コンサルティング会社を経て、経営人材紹介サービス会社立上げに参画。2005年より代表取締役。2007年に独立し、「経営のプロ」創出のシンクタンクであるプロノバ設立、同代表取締役社長就任。ベンチャー企業、再生中の企業に対し、年間約100名の「経営のプロ」人材を紹介。経営チーム組成アドバイスや次世代経営者育成アドバイスなど、経営者のディスカッションパートナーとして豊富な実績を保有。（ビヨンドトゥモロー発起人）

まず、何より素晴らしいと思うのは、一昨日出会うまで互いに知らなかった70人が、協力してひとつのことを作り上げたことだと思います。具体的には、一つ目として、皆さんの提言に被災した若者にしか分からない視点が豊富に盛り込まれていたという点を指摘したいです。我々が外にいては作れない、強い原体験があるからこその提言になっていた。そして、たくさん若者ならでは、モバイルの活用や、世代を超えた視点、というものが活かされていました。

二つ目は、考えるプロセスにおいての学びがあったのではないか、ということです。自分とは違う意見を持つチームのメンバーがたくさんいたことと思います。異なる地域の状況や、自分が持っていなかった考えと出会う、そういったプロセスの中での学びが感じられました。濃い体験をして頂けたのだろうと思います。

三つ目は、これが最も重要だと思いますが、皆さんが役割分担やアクションプランという具体的なプロジェクト案まで落とし込んでいたことです。国家戦略担当大臣に届けられるということはもちろんですが、皆さんが「毎週土曜日に何をやる」、「三ヶ月に一度何をやる」という形でコミットを示したということが非常に大きいと思います。このサミットは始まり、きっかけに過ぎないのだと思います。

皆さんに「人はリーダーに産まれるのではなく、リーダーになるのだ」という言葉を贈りたいです。仲間を大事にして、ぜひぜひ実行に移して行って下さい。そのためのサポートも提供していきたいと思っています。

高田　祐三　　公益財団法人AFS日本協会　　理事・事務局長

大阪府出身。北野高校在学中、1972年にAFSの19期生として1年間米国カリフォルニアに留学。79年東京大学法学部を卒業し、三井物産に入社。以来、主に化学業界を担当し、海外勤務は合計4回、9年を数える（全てニューヨーク駐在）。1999年に米国スタンフォード大学ビジネススクールのSEP (Stanford Executive Program)プログラムを受講。学生時代からAFSのボランティア活動に従事し、1980～2000年までの間断続的にAFS日本協会の評議員も務めた。2000年から2008年までの約7年半、同組織の国際本部（ニューヨーク）の理事も務めた。2008年3月に三井物産を早期退職し、2008年7月から現職。

まず感じたのは、日本の高校生は、世界のティーン・エイジャーや高校生と比べて頼りないんじゃないか、と言われることがあります。しかし、今日の発表を聞いて、日本の高校生も捨てたものではない、日本の未来は明るいなと感じることが出来、元気づけられました。

一番すごいなと思ったのは、皆さんの大変な経験が根底にあるからだと思いますが、重要な問題を自分のテーマだと考え、主体的に考えたということです。自分たちに何が出来るのか、何をすべきなのか、という形で提言が行われていた。誰か他の人、偉い人、政府がどうすべきか、ということではなく、あくまで「自分たちが」と主体的に考えたということが素晴らしかった。

もう一つは、いろんな苦しい体験があった時に、それをどのようにchallengeをopportunityに変えていけるのかというのはとても難しいことなのですが、皆さんの洞察と提言はまさにchallengeをopportunityに変えるということを具体的に体現されていました。

三日間頑張り抜いた結果として、斬新な面白い切り口も良い分析も出来ていたと思います。提言については、もっと深堀りをすることでより素晴らしいものになるのではと思います。ここはあくまで始まりで、ここからが大事だと思います。「継続は力」という言葉がありますが、ここから次はどうするんだ、ということを考えて頂ければと思います。今後とも、皆さんは社会で様々な役割を担っていくことになるかと思いますが、じゃあ次はどうしようか、ここからどうするんだ、という視点を常に持っていただきたいと思います。

東北の未来への
提言

最終提言発表

審査員による講評(2/2)

デビッド　サターホワイト
フルブライト・ジャパン（日米教育委員会）事務局長

米国生まれ。日本在住歴通算38年。韓米フルブライト奨学金を得てソウルの高麗大学アジア研究所にて研究、米国・ワシントン大学（シアトル）　政治学博士号。ハーバード大学をはじめ多数の大学で教鞭を取る。エコノミストグループ日本支部マネージング・ディレクター、在日米国商工会議所副会頭などを経て、現在はフルブライト・ジャパン（日米教育委員会）事務局長。日本語と韓国語が堪能で現在は中国語を習得中。

驚いたのは、皆さんの発信力です。一人ひとりの力を活かしながら、一方でグループとしてまとめたメッセージを作り上げ、発信に繋げていた点です。これは今後の東北や日本のあり方にも繋がる、素晴らしい成果であったと思い、勉強になりました。

このサミットには、将来リーダーを目指す高校生が集まっていると思いますが、皆さん既にリーダーなのではないかと思います。そして、これから育てていくべき一人ひとりの力がこの部屋に溢れていると感じます。そして、力や知識と経験なさったことを一人で活かしていくのではなく、皆の力が一緒になるんだ、という視点を持っていただきたいと思います。

この震災は東北で起こりましたが、日本や世界にとっても大きな出来事でした。私は日本に41年間住んでいますが、この出来事を通して日本国民の心がひとつになったという姿は感動的で心を動かされました。一人ひとりの力を活かして、皆で一緒に方向づけをし、行動をしていく。それが今後の復興で重要になってくると思います。

今日、いくつかのチームが「絆」という言葉を使っていました。東北だけでなく、日本だけでなく、世界との絆や繋がりを大切にし、それを力に変えて、一緒に長い道のりを乗り越えて行きましょう。

参加頂いた方々

宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、スポーツや音楽、文芸など幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

提言アドバイザー(1/3)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と思いの共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。

チーム1
齋藤 ウィリアム浩幸　Intecur, K.K. 創業者兼最高経営責任者

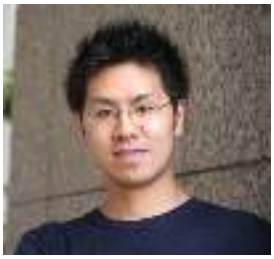
1991年にカリフォルニア州でソフトウェア会社を設立。セキュリティ・ソフトウェア開発で世界をリードする企業に発展させた。起業家、ベンチャー投資家として、過去20年にわたり、新規事業の立ち上げ、民間企業の経営、および情報セキュリティポリシーの策定を行っている。技術者でもあり、暗号や生体認証の分野における研究開発を行い、アメリカおよび日本で特許を取得している。（ビヨンドトゥモロー発起人）
（ビヨンドトゥモロー発起人）

チーム2
松古　樹美　野村ホールディングス
コーポレート・シティズンシップ推進室長　マネージングディレクター

上智大学法学部卒業。野村総合研究所入社。ニューヨーク大学およびジョージタウン大学にてロースクール法学修士号取得。ニューヨーク州弁護士。日本企業と、そこで働く日本人がグローバル化する手伝いがしたい、日本発の発信をしたい、とCSR活動の推進に取り組む。
（ビヨンドトゥモロー発起人）

チーム3
原　聖吾　マッキンゼー・アンド・カンパニー

東京大学医学部、スタンフォード大学経営大学院卒業。国立国際医療研究センター（国立国際医療センター：当時）を経て2007年に日本医療政策機構へ参画。生活習慣病、グローバルヘルス（国際保健）プロジェクトの立ち上げに携わる。現在マッキンゼー・アンド・カンパニー勤務。医師というバックグラウンドを活かしながら、様々なステークホルダーを巻き込んでの医療課題の解決に貢献すべく、政策立案、ビジネス、NPO／NGO活動など多岐に渡る領域での活動に取り組んでいる。



チーム4
伊香　修吾　オペラ演出家

岩手県宮古市に生まれる。盛岡第一高等学校卒業。東京大学大学院（経済学）修了後にオペラ演出を志す。ロータリー国際財団、野村国際文化財団などの奨学金を受けてロンドンに学び、ミドルセックス大学大学院（舞台演出）を修了。その後ザルツブルク音楽祭、ウィーン国立歌劇場、英国ロイヤルオペラなどの公演に参加し経験を積む。自身の演出作品に「カルメン」「コジ・ファン・トゥッテ」「リゴレット」「ワルキューレ」「こうもり」「ヘンゼルとグレーテル」などがある。第19回（平成20年度）五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。

参加頂いた方々

宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、スポーツや音楽、文芸など幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

提言アドバイザー(2/3)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と思いの共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。

チーム5
籠島　康治　　株式会社電通
ソーシャル・デザイン・エンジン／コピーライター

会社での広告制作のかたわら、ソーシャル・デザイン・エンジンの一員としてソーシャルなプロジェクトにクリエーターとして携わる。社外でもNGOとの協働でさまざまなコンテンツを発信する2025PROJECTの一員としてさまざまなプロジェクトで活動。
九州大学、上智大学大学院非常勤講師、共著に「たりないピース」（宮崎あおい、宮崎将）「生き物たちへのラブレター」（滝川クリステル）「世界を変える仕事44」（Sweet Smile）など。

チーム6
藤沢　久美　　シンクタンク・ソフィアバンク副代表
社会起業家フォーラム副代表

NHK教育テレビ「21世紀ビジネス塾」のキャスターを3年間務め、その間、全国の中小企業やベンチャー企業の取材を行ってきた。その後も、様々なテレビ･ラジオ・雑誌等を通じて、800社を超える企業を取材。現在も、全国の元気な企業の経営者のインタビューと現場の取材を続け、メディアを通じて発信している。現在、マスメディアとネットメディアを結びつけることによる新しい社会的事業の育成「ソシオ・インキュベーション」の活動に取り組んでいる。
（ビヨンドトゥモロー発起人）

チーム7
具志　林太郎　　カルー株式会社　代表取締役

神奈川県出身　2005年慶應義塾大学環境情報学部卒。大学時代は学生NPO団体アイセック所属。主に日本と中国間の国際インターンシップ事業を担当していました。中国の成長力に驚愕。2005-2010年、ゴールドマン・サックス証券勤務。投資調査部で企業調査、日本株トレーディング部で自己勘定トレードを担当しました。2010年に大学時代の後輩3名とカルー株式会社設立。同社代表取締役。中立的な口コミを旨とする病院口コミ検索サイトを運営しています。7ヶ月と2歳3ヶ月の二児の父親。

チーム8
相良　純子　　建設技術研究所　東京本社水システム部　主幹

静岡県出身。高校2年生の時にカナダのインターナショナルスクールに留学。世界中から集まった学生達と共に学び、世界の様々な問題に触れるうち、将来は人の生活を根幹から支える仕事に就きたいと思う。高校卒業後はカナダのマギル大学および米国のマサチューセッツ工科大学大学院で土木環境工学を学び、開発途上国の村落地域向けの浄水器の開発に携わる。卒業後日本に帰国。現在はエンジニアとして、安全な水の安定的な供給や、洪水被害軽減のための国や地方自治体の計画づくりに携わっている。

参加頂いた方々

宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、スポーツや音楽、文芸など幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

提言アドバイザー(3/3)

様々な知識と経験を持つ提言アドバイザーが、各チームをサポートしました。参加学生たちの体験と思いの共有、そしてそれらを基盤とした東北の未来についての議論をサポートし、具体的な提言へと導きました。

チーム9
船橋　力　　株式会社ウィル・シード　代表取締役社長

ブラジル在住時代インターナショナルスクールにおいて、日本人初の生徒会長に就任、全米の高校対象に上位3%の優れた学生に贈られる賞を受賞。大学卒業後、商社に入社。ジャカルタ地下鉄推進プロジェクトなどを手掛ける。また自ら異業種ネットワークを設立、各種イベントや勉強会を企画・運営、3年間で約3000名のネットワークに育てた。商社を退社後、株式会社ウィル・シードを設立し、企業や学校教育現場に体感を重視した教育プログラムを提供している。
（ビヨンドトゥモロー発起人）

チーム10
宮沢　正知　　国土交通省　官民連携政策課

神奈川県出身。東京大学法学部卒業後、日本中の街をもっと活気がある住みやすい街にしたいという思いで、国家公務員になり、国土交通省に勤務。建物のバリアフリー化、生活に必要なバス交通の維持、行政と民間が連携した街づくりなど、さまざまな仕事に従事してきた。2004年から2006年にかけては、アメリカのマサチューセッツ工科大学都市計画学科に留学し、修士号を取得。留学中は、アメリカの衰退している商店街を調査して再生計画を作成するなど、街の活性化について調査。最近の趣味は、車であちこちの街をめぐること。

ゲスト(1/3)

政治やビジネス・スポーツ等、幅広い領域で活躍するリーダーをお招きし、参加学生へのメッセージをいただくと共に、リーダーと70人との対話が生まれました

浅尾　慶一郎　　衆議院議員

1987年東京大学法学部卒業後、日本興業銀行入社。米国スタンフォード大学経営大学院　卒業(日本興業銀行より留学)(MBA)。日本興業銀行退職後、1998年参議院議員(　神奈川選挙区)　初当選。2004年参議院議員(神奈川選挙区)2　期目当選。2009年衆議院議員(　比例区南関東ブロック)初当選。2005年世界経済フォーラムより「Young Global Leaders」に選出。みんなの党　政策調査会長。（ビヨンドトゥモロー発起人）

参加頂いた方々

宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、スポーツや音楽、文芸など幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

ゲスト(2/3)

政治やビジネス・スポーツ等、幅広い領域で活躍するリーダーをお招きし、参加学生へのメッセージをいただくと共に、リーダーと70人との対話が生まれました。

近藤　正晃ジェームス　Twitter日本代表、一橋大学客員教授

慶應義塾大学経済学部卒業。ハーバード大学経営大学院卒業。世界七カ国における経済政策を立案した経験を持つ。東京大学において、医療分野を中心に政策研究活動に従事し、医療政策に従事する人材を養成するための講座および医療系シンクタンクを運営した。開発途上国の飢餓と先進国の過食・肥満を同時に解消し、アフリカに給食を届ける非営利団体を設立。現在はツイッター日本代表および一橋大学客員教授。（ビヨンドトゥモロー発起人）

佐藤　輝英
株式会社ネットプライスドットコム　代表取締役社長　兼　グループCEO

高校時代にイタリアに留学。慶應義塾大学総合政策学部卒。ソフトバンク入社、サイバーキャッシュ出向。2000年ギガフロップス取締役就任。ネットプライス社長兼CEO就任。ギャザリング、ブランディア、セカイモン等、各種のEC事業を展開。上海、シリコンバレー、シンガポールにもビジネス展開中。（ビヨンドトゥモロー発起人）

高島　宏平　オイシックス株式会社 代表取締役社長

外資系経営コンサルティング会社で、2000年5月の退社までEコマースグループのコアメンバーの一人として活動。 2000年6月に「一般のご家庭での豊かな食生活の実現」を企業理念とするオイシックス株式会社を設立し同社代表取締役社長に就任。作った人が自分の子供に安心して食べさせることができる食品だけを届け、生産者の論理ではなくお客様の視点に立った便利なサービスを推進している。（ビヨンドトゥモロー発起人）

高成田 享
特定非営利活動法人　東日本大震災こども未来基金 理事長

朝日新聞社に入り、山形、静岡支局を経て経済部記者。アメリカ総局員（ワシントン）、経済部次長、論説委員などを経験。96年から97年までは、テレビ朝日「ニュースステーション」キャスターも兼ねた。98年から2002年までアメリカ総局長（ワシントン）。帰国後、論説委員に戻り、米州や国際経済を担当。定年を機にシニア記者として08年1月から11年2月まで石巻支局長を務める。4月から仙台大学教授。東日本大震災を機に、東日本大震災復興構想会議の委員に就任。また、震災で親をなくした児童・生徒を支援する「東日本大震災こども未来基金」理事長。

参加頂いた方々

宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、スポーツや音楽、文芸など幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

ゲスト(3/3)

政治やビジネス・スポーツ等、幅広い領域で活躍するリーダーをお招きし、参加学生へのメッセージをいただくと共に、リーダーと70人との対話が生まれました。

為末大　ハードル選手

世界大会において、トラック種目で日本人初となる2つのメダルを獲得し、3大会連続オリンピックに出場した陸上選手。現在は4大会目となる2012年ロンドンオリンピックを目指している。2009年からは拠点を米・サンディエゴに移し、2012年のロンドンオリンピックに向けて再スタートを切った。競技外でも、全国の小学校を訪問し、陸上の普及を目的とした「キッズアスリート・プロジェクト」への参加や東京・丸の内の公道を封鎖し、陸上のPRを図った「東京ストリート陸上」実現など活躍。2010年8月、マイナースポーツ選手の自立支援を目的とした「一般社団法人アスリートソサエティ」を立ち上げた。

牧原　秀樹　　前衆議院議員
弁護士・ニューヨーク州弁護士 政策研究大学院大学客員研究員

東京大学法学部卒業。あさひ法律事務所（現西村あさひ法律事務所）、世界貿易機関（WTO　ジュネーブ）法律部、Hogan & Hartson LLP（法律事務所）、MASUDA＆EJIRI（現西村あさひ法律事務所NYオフィス）などを経て、経済産業省通商政策局通商機構部入省。２００５年、衆議院選挙に埼玉5区から立候補、初当選。2008年4月インターアクション・カウンシル（OBサミット）主催のヤング・リーダーズ・サミットの第1回日本代表（世界の20人）に選出される。
（ビヨンドトゥモロー発起人）

松崎　みさ　　株式会社アシモード　代表取締役社長、アガスタ ファウンダー

大学卒業後、コンサルタント会社勤務を経て1997　年に26歳で中古車販売会社を起業。業績好調の中2007年に出産を経験、2009年に会社を売却。2010年7月に「ふだんの暮らしにナチュラルをプラス」をテーマにした「ブルーミングロータススタジオ」を都内にオープンさせる。
（ビヨンドトゥモロー発起人）

松田　公太　　参議院議員、タリーズコーヒージャパン創業者

1968年、宮城県塩釜市生まれ。5歳から17歳の大半をアフリカとアメリカで過ごす。1990年、筑波大学国際関係学類卒業後、三和銀行（現・三菱東京UFJ銀行）に入行。その後、1998年にタリーズコーヒージャパン株式会社を設立。約3年で株式を上場し、300店舗を超えるコーヒーチェーンに。2007年には、世界経済フォーラム(通称：ダボス会議)のYoung Global Leaderとして選出される。開発途上国の飢餓解消に取り組むNPO「TABLE FOR TWO international」理事でもある。2010年　参議院議員選挙にみんなの党より立候補、東京都選挙区にて当選。
（ビヨンドトゥモロー発起人）

参加頂いた方々

宿泊を伴う対話形式のプログラムの中では、スポーツや音楽、文芸など幅広い領域で活躍する第一人者の方々を招いて将来のビジョンについて考える機会を提供いたしました。

大学生チームリーダー／運営サポートボランティア

各チームに大学生チームリーダーが一人ずつ配置され、議論のファシリテーションから生活面・心のケアまで24時間体制で参加学生のサポートにあたりました。また、参加学生の体験の質向上に向け、文字通り会場内を走り回った運営サポートボランティア抜きには、サミットの円滑な運営は実現できませんでした。

志田　潤平	岩手大学　工学部社会環境工学科1年	石原　昌尚	慶應義塾大学　理工学部修士1年
近藤　一樹	東北大学　経済学部3年	小角　真弥	早稲田大学　文化構想学部4年
大沢　侑玉	早稲田大学　教育学部4年	金指　了	駒澤大学　グローバルメディアスタディーズ学部4年
古賀　理恵	日本女子大学　人間社会学部教育学科4年	白石　翔太	青山学院大学　理工学部4年
小田　三成	青山学院大学　教育学科3年	高垣　陽子	中央大学　法学部法律学科4年
新藤　克貴	東京大学　経済学研究科経営専攻修士1年	米村　崇	慶応義塾大学　経済学部1年
西尾　暢朗	慶応義塾大学　商学部1年		

（順不同）

事務局メンバー

坪内　南　ビヨンドトゥモロー　理事・事務局長

東京都出身。中学校3年より親元を離れカナダへ単身留学。カナダの全寮制インターナショナルスクール卒業。慶応義塾大学総合政策学部卒業。マサチューセッツ工科大学都市計画修士課程修了。マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、アフガニスタンで戦後復興支援の活動をしたり、スイスの世界経済フォーラム（ダボス会議）で仕事をして、今年の6月まで中東・バーレーンの経済開発委員会で働いていた。今はビヨンドトゥモローで東北の若い学生さんたちと交流することが元気の源。好きな言葉は「意志あるところに道あり」。
（ビヨンドトゥモロー発起人）

井上　裕太　ビヨンドトゥモロー　事業統括

直江兼続や上杉鷹山が活躍した山形県米沢市生まれ。
慶応義塾大学法学部政治学科卒業。2007年から5年間マッキンゼー・アンド・カンパニーに勤務。製造・金融・医療等様々な業界の営業部隊改革、国内企業のグローバル展開に向けた人材育成プログラムの設計等を始めとして国内外の企業の経営コンサルティングに従事。また政府系機関や非営利団体とのプロジェクト経験も持つ。

阪本　麻友　ビヨンドトゥモロー　プログラムコーディネーター

奈良県出身。6歳から15年間フィギュアスケートに専念。大阪府立女子大学理学部応用数学科卒業。22歳ロート製薬に入社、4年間情報システム部に勤務。25歳よりクラシックバレエを始める。 東日本大震災のニュースを見て何かしなければと個人で現地ボランティアに参加する中で、将来への不安をかかえる状況に心を痛める。現在は、夢を持つ子どもたちの背中を押してあげたいとビヨンドトゥモローに参画。

メディア掲載

国内外の新聞・ウェブサイト等様々なメディアで報道されました。70人の参加学生たちの活躍が、多くの人に注目されています。

TV

「NEWS23クロス」
(2011/11/11 TBS)

新聞

「東北の復興を提言　3県の高校生募集」
（2011/10/12　読売新聞）

“Tohoku teens share views of survival”
（2011/11/10　JAPAN TIMES）

「東北の復興を　高校生が探る」
（2011/10/10　河北新報）

「東北未来リーダーズサミット参加高校生募集」
（2011/10/10　岩手日報）

「高校生の参加募集」
（2011/10/12　三陸新報）

「東北未来リーダーズサミット　14日まで参加者を募集」
（2011/10/12　いわき民報）

「復興語り合う高校生募集」
（2011/10/13　福島民友）

WEB

「被災した若者たちのリーダーシップを育てる事業として
「東北未来リーダーズサミット」を開催します」
（2011/10/14　LOVE＆HOPE～ヒューマン・ケア・プロジェクト～）

「サポート情報：奨学金」
（2011/10/03　毎日．jp（毎日新聞））

協力団体

多くの団体・企業の皆さまからのご支援・ご協力により、無事プログラムを実施することができました。篤く御礼申し上げます。

後援

内閣府

文部科学省

知事メッセージ

岩手県

宮城県

福島県

協力団体

特定非営利活動法人　東日本大震災こども未来基金

支援企業

株式会社ガリバーインターナショナル、武田薬品工業株式会社、
フェデックス キンコーズ・ジャパン株式会社、三菱重工業株式会社、
ロート製薬株式会社、CLSA

撮影協力

神戸芸術工科大学 infoGuild

デザイン協力

中河 綾子

BEYOND Tomorrow とは

目的

「BEYOND Tomorrow／ビヨンドトゥモロー」は、東日本大震災における震災孤児や震災遺児をはじめとした被災児童に対して、 次世代を担うリーダーやスペシャリストとなる人材となるための支援プログラムを提供する教育支援事業です（運営：一般財団法人　教育支援グローバル基金）。当事業は、未来を担う若者が今回の災害によって教育機会を失われることのないよう、奨学金提供ならびに国内外のトップクラスの教育機関との提携による就学支援・リーダーシップ教育などの各種プログラムを提供し、次世代を担う人材輩出の支援を行う計画です。
震災・津波という困難を経験したからこそ、他者への共感をもって広い社会のために行動を起こすことができる人材が出てくると、私たちは信じてやみません。そんな意欲ある若者たちに、惜しみない支援を送りたいと考えています。

特徴

志ある学生の夢の実現のお手伝いに特化し、金銭的な支援だけでなく対話を通して大志の実現を助け、グローバルな視野を持つ人材を育成します。また、今回の逆境を乗り越えて、自らがより主体的に社会に関わることができるような機会を提供することにより、他者に対する共感力をもつ人材の育成を目指します。

内容

i. 進学支援 - 大学進学に際し、全奨学金（学資・生活費含む）を提供（返済不要）

ii. メンタリングサポート - 各界で活躍する発起人自らが「メンター」となり、参加者が困難を乗り越え、将来の夢を持ち、それに必要なアクションに向かうまで、対話を通してサポートを提供

iii. 企業プログラム-インターンシップや対話イベントなどを通し、支援企業とプログラム参加者が直に接する機会を提供

iv. アンバサダープログラム-対象児童自らが、被災・復興の伝道師として国内外に情報発信し、自然災害の恐怖や求められる施策について世界の認識を高めるための場を構築

組織構成

アドバイザー	竹中　平蔵	慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所　所長 総合政策学部　教授
代表理事	近藤　正晃ジェームス	Twitter日本代表、一橋大学客員教授
	高島　宏平	オイシックス 代表取締役社長
	藤沢　久美	シンクタンク・ソフィアバンク 副代表、社会起業家フォーラム 副代表
	船橋　力	ウィル・シード 代表取締役社長
理事	浅尾　慶一郎	衆議院議員
	岡島　悦子	プロノバ 代表取締役CEO
	小林　正忠	楽天 取締役常務執行役員
	佐藤　輝英	ネットプライスドットコム 代表取締役社長 兼 グループCEO
	堀　主知ロバート	株式会社サイバード 代表取締役社長　兼　グループCEO
	牧原　秀樹	前衆議院議員　弁護士・ニューヨーク州弁護士 政策研究大学院大学客員研究員
	松崎　みさ	株式会社アシモード 代表取締役社長、アガスタ ファウンダー
	松田　公太	参議院議員、タリーズコーヒージャパン創業者
監事	江崎　滋恒	アンダーソン・毛利・友常法律事務所　弁護士
評議員	茅野　みつる	カリフォルニア州弁護士
	土井　香苗	ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表、弁護士
	宮城　治男	NPO法人ETIC.　代表理事
理事・事務局長	坪内　南	一般財団法人教育支援グローバル基金事務局長
賛同者	岩瀬　大輔	ライフネット生命保険 代表取締役副社長
	大塚　拓	前衆議院議員、政策研究大学院大学客員研究員
	齋藤 ウィリアム浩幸	インテカー Intecur, K.K.創業者兼最高経営責任者
	堂前　宣夫	株式会社ファーストリテイリング　上席執行役員
	西山　浩平	エレファントデザイン株式会社 代表取締役会長
	松古　樹美	野村ホールディングス　コーポレート・シティズンシップ推進室長、 マネージングディレクター、ニューヨーク州弁護士
	山崎　直子	宇宙飛行士

BEYOND Tomorrow
一般財団法人　教育支援グローバル基金
http://www.beyond-tomorrow.org/

〒150-0041　東京都渋谷区神南1-5-7　ETIC. 内
info@beyond-tomorrow.org

©一般財団法人　教育支援グローバル基金